

北海学園120年の120人 95

拓北の群像 建築・環境・情報



自らの目を切り取り、狂気の果てに三十七歳でピストル自殺した天才画家ゴッホ。その「炎の人」が破滅の二年前に描き残したとされる有名な一枚のスケッチには、大きな秘密が隠されていた。

著書「ゴッホの遺言」の中で小林英樹(一九四七年埼玉県川越市生まれ)は、スケッチを贋作と直感し、独自の視点と緻密な分析によって謎を明らかにしていく。やがて闇の向こうに、浮かび上がった衝撃的な真実。これまで世界中の多くの人が抱いてきたゴッホ像は崩れ去り、美術史の定説さえも覆される。

絵画評論として秀逸だが、ロジックを構築しながらスリリングに謎解きを展開するストーリー性が高く評価されて日本推理作家協会賞に輝いた。「ゴッホの証明」「耳を切った男」と続く連作も、ノンフィクションながらミステリーとしても楽しめる。小林は、東京芸大で油画を専攻した画家でもあり、平成十二(二〇〇〇)年から工学部建築学科教授。ゴッホを中心にした近代絵画を研究するとともに、建築学生の造形的思考力を育てるデザイン・造型演習などを担当する。

小林、ゴッホの謎鋭く究明 遺伝応用の真柄、表現の米田

建築学科の教授陣では、真柄祥吾(一九五三年宮城県生まれ)の研究もユニークだ。構造物の解析法に関する研究が専門で、「遺伝的アルゴリズム」という計算法の建築構造物の設計への応用を目指す。「遺伝的アルゴリズム」とは、生物が淘汰や突然変異などによって環境に順応しようとする遺伝の法

則をまねて、複数のデータを遺伝的に変化させながら問題解決の道を求める手法。真柄は、この手法を鉄骨の構造物に応用し、より断面積が小さく経済的な設計を実現しようとする。また発展途上の研究段階にあるが、今後、本格的な建築物への応用が期待されている。北大大学院工学部建築学科を専攻し、昭和五十九(一九八四)年から学園大の教壇に。釧路沖、北海道南西沖地震の災害調査にも当たり、耐震診断判定委員会委員。建築設計の米田浩志(一九六〇年旭川生まれ)は東海大工学部卒で、平成五(一九九三)年着任。建築は人間の表現行為の一つで、社会の文化的側面をも表出するとの考えに立って、さまざまな建築表



小林 英樹



真柄 祥吾



米田 浩志



桜井 修次



佐藤 謙



余湖 典昭



深谷 健一



中ノ井 高洋

この研究成果は、札幌ドームの屋根空間を構成するアーチトラス鉄骨部材の断面寸法の設計に利用され、注目された。社会環境工学部教授の当麻庄司との共同で開発し

佐藤謙(一九四八年山形県利根市生まれ)は、北大大学院で農業生物学を専攻し、学術博士。昭和四十八(一九七三)年着任。北

やウトナイ湖流入河川などでのフィールド調査を継続し、生態系に配慮した土木技術・環境アセスメントに関する研究と学生の指導に力を注ぐ。ホタルの自生地をつくるプ

た。(敬称略)

先端科学で優しい都市文化を創造

現と実践的なデザイン手法を研究する。成熟期を迎えたとされる建築文化の新たな方法論の確立に向けて、先端的な建築作品の制作にも取り組む。「空虚感漂う新興住宅地の街並みを打破したい」と、建築家五人が隣り合わせに家を競作するプロジェクトを江別市の新興住宅地「大麻ソルジャー」に進めた。北海道建築奨励賞などを受賞。

た「ホタテ貝毒の微生物学的簡易定量法」は、北海道新聞学術文化研究奨励を受けた。日本雪工学会会員で、ノルウェーで開催された雪工学国際会議などでも研究発表している。

海道の高山における植物群落と生態環境の関連を調査・研究するとともに、北海道希少植物の保全にも力を注いでいる。道内のほとんどの山を踏破し、芦別市南部の峠(きりぎりし)山だけに生息する「キリギシソウ」を発見・命名した。北海道自然保護協会副会長などを務め、永年の研究成果や自然保護活動は高く評価されている。「松下幸之助花の万博記念賞奨励賞」(二〇〇一年)受賞。

「からくり人形や鉄腕アトムが身近な存在と感ずる文化的背景は、日本がロボット大国として進む基盤になっている」という。少子高齢化に伴って介護者らの負担を軽減する「福祉ロボット」への応用などが期待されている。

ドームの陰に雪工学の桜井 高山植物の佐藤、水質の余湖

北海道開発の技術者養成を担った土木工学科は、自然との共生を図る循環型社会の実現を目指して、平成十七(二〇〇五)年度から社会環境工学部として新たなスタートを切った。「環境・維持管理・情報」をキーワードに、教授陣とカリキュラムの充実が図られている。

水環境工学の余湖典昭(一九五二年小樽生まれ)は北大大学院修了、北大大工学部助手を経て昭和五十七(一九八二)年着任。湖沼、河川、地下水などの自然水域の水質の予測・制御・解析についての研究を専門とする。特に、札幌・定山溪ダムの上流流

過程・システムを脳波の成分測定とデータ解析によって解明しようとする。ロボット技術への応用が見込まれる。データ解析の手法に関する研究は、手書き文字認識や重種馬の繁殖などに応用されている。また、神経回路に関する解析研究の過程では、埋め込む際に最適な形状を持った人工関節の設計への応用の道が開かれた。



ユニーク頭脳集団

ロケットでは、学生とともに自然繁殖が可能な環境づくりに取り組んでいる。北海道環境影響評価審議会委員。

深谷、福祉ロボット夢でない バイオメカニクスの山ノ井

電子情報工学の分野では、平成十(一九九八)年開設の研究機関ハイテク・リサーチ・センターで先端的な研究が進められている。視覚・画像情報処理、音声・言語情報処理、ロボット・制御情報処理の各研究で新技術の確立と応用を目指す。メカトロニクスの深谷健一(一九四四年函館生まれ)は北大大学院修了、工学博士。NNTT電気通信研究所を経て昭和六十二(一九八七)年から工学部教授。自律移動ロボットを実現するための自己位置・周囲環境の認識やナビゲーション、人間追尾の各種センサシステムの研究に取り組む。

北海学園大学

10月1日(土)午後1時~4時 第2回オープンキャンパス

- 進学説明会、個別相談会、施設見学などを予定
- 来場者プレゼント 過去問題集、入学案内一式、オリジナルグッズ
- シャトルバス 豊平、山鼻両キャンパス間を随時運行
- 事前の参加申し込みは不要 ●問い合わせ 入試部電話011(841)1161